

12月14日（木）高知地裁にて第7回ビキニ核被災国家賠償訴訟の口頭弁論が開かれ、元マグロ漁船員ら5名と、32年間国家の壁に高校生とともに調査し証拠を積み上げてきた山下正寿氏が証人尋問に立ちました。

元船員ら5人は、苦しみ先立った仲間の無念の思いを力に、人生初めての証人尋問に関わらず堂々と思いのたけを証言し傍聴者の胸をうちました。

山下氏の32年間にわたる調査に裏付けられた証言は、法廷内の空気を一変させ裁判の行方に光をあてるものだったと思います。

3時間近くにわたる証人尋問に、3人の裁判官は終始真剣なまなざしで聞き入る一方、国の代理人弁護士は原告らの証言に対してまともな質問さえすることができず、不真面目な姿勢の弁護士すらいました。

次回、2月16日（金）に結審が言い渡されます。裁判官の真剣な姿勢と、まともな反論ができなかった国側を見た時、ビキニ事件は、第五福竜丸だけでなく多くのマグロ漁船員たちが被災した事実は、1年半にわたる7回の口頭弁論の中で明らかになりました。この事実を無視しての判決はありえないのではないかと私は確信を持ちました。

写真は本日15日の「高知新聞」社会面、「朝日新聞」地方版、「毎日新聞」地方版です。朝日新聞、毎日新聞の記事は私の持っているスキャナーに取り込めない大きな紙面でした。

山下氏が記者会見で「あまりにも壁が厚く、今日みたいな日を迎えるとは思わなかった。一つ一つ資料を積み上げて、風穴が開いたのではないか。どんなに権力が強くても、事実には勝てない」と語りました。決して楽観はできませんが、きっと春には全ての新聞の一面トップを飾れる判決が出されることを期待し、本日の新聞記事を添付します。